

平成 17 (2005) 年 8 月 5 日

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.43

ご挨拶

竹中 龍範



日本英学史学会が創設 40 周年を迎え、その記念大会が早稲田大学を会場に開催されたのは昨秋のことでした。この学会は、年次全国大会のほかに月例会を開催して会員に発表の場を提供しておりますが、これとあわせ、各支部の研究活動も意欲的に進められております。その中でも、わが中国・四国支部は、広島支部としての発足以来、その活動の成果を『英學史會報』、『英學史論叢』という形で公にし、各方面からの評価を受けるところとなっております。しかし、これは支部例会における研究発表の質と量、ならびに支部会員の支えによる財政基盤とがトータルバランスをなして初めて可能に

なる成果であり、そのいずれが欠けても支部活動は低迷をきたします。いっそうのご支援をお願いする所以です。

また、各支部の活動内容が日本英学史、すなわち地域性という制約を受けない英学史の研究と、それぞれの地域、地方に関わる英学史の研究との両面を担うべきであるとする、特に後者にあっては、これまで広島支部時代にすでに域外に及び始めていたその版図が、文字通り中国・四国 9 県に拡大されるべきであることは言うまでもありません。各地域、地方には、この方面の研究に関心をお持ちの方が、あるいは、この種の研究が英学史と呼ばれる領域とは知らずに資料を集め、その研究を進めている方がおられようかと思えます。会員各位のご研究とあわせ、このような方々へのご勧誘をお願い申し上げます。

草創期の広島支部を安定した組織に築き上げられた定宗、妹尾両先生、その発展期を担っていただいた寺田、松村両先生、ならびに拡充の時代を開かれた小篠先生の後を襲って支部長の大役を仰せつかりましたが、これからの支部活動をいかなるものにすべきか未だに答を見出しかねているところです。支部役員の方々ならびに会員の皆さまのお知恵を拝借しながら形あるものにできればと願っております。ご協力のほどをお願い申し上げます。

(中国・四国支部長)

平成 17 年度 中国・四国支部総会 及び第 1 回（通算 52 回）支部研究例会



平成 17 年度支部総会・第 1 回例会報告

平成 17 年度の支部総会、ならびに第 1 回研究例会は 5 月 28 日（土）午後 1 時より、広島市の安田女子大学（広島市安佐南区安東 6 丁目 13-1 TEL(082)878-8111(代) 7 号館 7405 教室を会場として行なわれました。

支部総会では、支部長挨拶に続いて会員の栗栖英雄先生を司会者として選出し、審議を行ないました。昨年度の活動報告および会計報告・会計監査報告、平成 17・18 年度役員の選出、今年度の活動計画について、それぞれ事務局より原案が示され、すべて満場一致の拍手で承認されました（詳細は以下の役員会報告をご覧ください）。

続く研究例会は、以下のプログラムで行なわれました。

第 1 回（通算第 52 回）支部研究例会

- ・開会行事（13:40-13:50）
新支部長挨拶 竹中龍範（香川大学）
- ・研究発表（13:50-15:30）
 1. 「竹原常太の総合基本語彙表」
鉄森令子（大日本ランゲージクラブ）
司会 馬本 勉（県立広島大学）
 2. 「永原敏夫の英語教育研究」
松村幹男（広島大学名誉教授）
司会 竹中龍範（香川大学）

- ・講演（15:50-16:50）

「日本の英語教育 来し方行く末」
小篠敏明（福山平成大学）
司会 松岡博信（安田女子大学）

- ・閉会行事（16:50-17:00）

新副支部長挨拶 田村道美（香川大学）

- ・懇親会（18:30-）

会場：広島駅ビル内・銀座ライオン
参加者 10 名

研究発表および講演のレポートを以下に掲載します。

鉄森令子先生の研究発表を拝聴して

竹原常太が独自に作った「総合基本語彙表」について、鉄森先生が発表をされた。

今から 80 年ほど昔、竹原は「語学教育の合理化」を唱え、それを実現させるため独自に「総合基本語彙表」を作成し、それを基に *Standard English Readers*、*Girls Standard Readers*、*New Standard Readers* という 3 つの教科書を編纂した。

当時、英語教育には風当たりが強くなり、英語を全廃してはどうかという意見も出ていた。そんな中、竹原は 16 種類の英語の教科書の共通語彙を調査し、



第1巻には314語と少ないことを指摘し、「今日の急務は教授法、学習法殊に教科の内容に相当の改善を施すことである」(竹原)と、日本の学生が習得しなければならない最小限の語彙の選定が必要であると述べた。

竹原の「総合基本語彙表」は、米国のソーンダイク、ホーン、ブリード、デューイの各基本語表の他、基本語彙表12種を基に合理的に編纂し作成したものである。竹原によると、この「総合基本語彙表」は7,000語になる。しかし、『スタンダード』に掲載されている語は5,048語だけで、残りの1,962語の語彙は不明になっている。この約2,000語の語彙は何だったのか、鉄森先生は現在判明している語彙を分析することにより、これら2,000語の復元を試みられた。

研究の方法として、*Standard English Readers*の1巻から5巻までの巻末リストの語彙を入力し、重要順位別に並べ替えたものを基礎データとし、竹原が参照したというソーンダイク、ホーン、入試英語のデータを入力。この基礎データの語に、*Girls Standard Readers*、*New Standard Readers*の趣意書からの語の番号を入力、さらに*Standard English Readers*、*Girls Standard Readers*、*New Standard Readers*の語彙の比較によって明らかになる「順位の変化」に注目し、分析をされた。

分析の結果、ソーンダイク、ホーンの語彙表の語彙が多く含まれているが、重要度は一致していないこと、入試英語が多く含まれていること、*Standard English Readers*、*Girls Standard Readers*、*New Standard Readers*間では語彙の重要度が違うことが明らかになった。

竹原は自身の総合基本語彙表を基準として教科書を作ったと述べているが、今回の鉄森先生のご発表において「教科書を編纂する際、使用した語彙表は複数あるのではないか」と指摘されたことは大きな成果であろう。

竹原の語彙表は、欧米の頻度表を基盤にして科学的に編纂しながらも、日本の学生の実情に合うよう配慮して作られていた。膨大な量の単語をひとつひとつ手で数えることは、大きな努力がいったことと思う。英学史の世界をまだ覗いたばかりの私は、こうした過去の先生方の研究を知って、そのすばらしさに圧倒されるばかりだ。今後、鉄森先生により竹原の総合基本語彙表がさらに明らかになれば、英語教育の語彙指導の指針となると思う。

(瀬戸麻由佳・比治山大学)

松村幹男先生の研究発表を拝聴して



昭和戦前期の約20年間、広島高師附属中学・広島高師における中心的人物である永原敏夫の英語教育研究に関するご発表である。永原敏夫(1898-1945)は明治31年広島生まれ。広島高師附属小・中・高師と広島高師で教育を受け、教授者として活躍された高師一筋の方である。

昭和10年代に隆盛を誇った広島文理科大学英語教育研究所は、小日向定次郎を初代所長とし英語教育推進の原動力となった先人たちが集まっていた。その中であって、永原は特に英語教育理論と実践の分野では抜群の存在であったという。得意分野は学力・テスト評価論で、研究として「語学力検定法に関する諸問題とその考察」(『英語英文学論叢』第1巻第2号、昭和7)や『試験と学修』(昭和11)がある。手元の『試験と学修』を読んでみると、予習・辞書指導・多読・自由英作文などについても言及され貴重なアドバイスが書かれている。例えば、長期期間中の学修指導では「課題の組織が持続を強制するやうになっていることと、持続に興味を感じさせて自発的に持続的態度を採らせる仕組にすること・・・」をみると、今年の夏休み課題も量は多く与えようと考えていた筆者には反省させられることしきりである。

発表の中で紹介された永原の「韻文を取扱へる教授案」(『中等教育の実際』第24号昭和13年5月)は「中学校3年を対象に1つの詩を2hかけて、朗読(本を閉じたまま2回・開いて1回・2行ずつ朗読)、2行ずつ散文で口頭発表(英語によるparaphrase)、口頭で言わせて筆記、絵の得意な生徒に、詩のイメージを黒板に絵を描いてもらう。」といったきめ細かい指導で、英詩の授業に関心をもつ筆者に一度はやってみたいと思った理想の指導法である。すべて英語による指導であったと、あとで発表者の松村先生よりお聞きし、ますます感服するばかりであった。ペンネームの「十潮子」は発表者側とフロア側の連携で、永原敏夫と確認できたことは研究発表会のよさであることを再認識させられた。

発表の中で紹介された永原の「韻文を取扱へる教授案」(『中等教育の実際』第24号昭和13年5月)は「中学校3年を対象に1つの詩を2hかけて、朗読(本を閉じたまま2回・開いて1回・2行ずつ朗読)、2行ずつ散文で口頭発表(英語によるparaphrase)、口頭で言わせて筆記、絵の得意な生徒に、詩のイメージを黒板に絵を描いてもらう。」といったきめ細かい指導で、英詩の授業に関心をもつ筆者に一度はやってみたいと思った理想の指導法である。すべて英語による指導であったと、あとで発表者の松村先生よりお聞きし、ますます感服するばかりであった。ペンネームの「十潮子」は発表者側とフロア側の連携で、永原敏夫と確認できたことは研究発表会のよさであることを再認識させられた。

発表の冒頭で松村先生のおっしゃった、「戦前に活躍され、戦後に伝わらなかった人物・学校の

研究の大切さ」という言葉を英語教育史を研究するものとして心にとめておかなければならないと感じたものであった。

(隈 慶秀・福岡県立明善高等学校)

日本の英語教育 来し方行く末 -

小篠敏明先生のご講演の副題は「英語教育の新しい姿を求めて」である。冒頭で、先生は、英語教育の来し方(過去)を見てみると行く末(未来)が見えてくると言われた。



私は、昨年までの3年間小篠先生の広大での最後の教え子として、博士論文(パーマー研究)や英語教科書の実証的研究に関して教えを請うた。その経験からすれば、今回の発表は先生の歴史研究、実証的研究の集大成であるように思えた。そして話を聞くうちに、歴史学者 E. H. カーの名言、「歴史は過去と未来との対話である」を思い出さずにはいられなかった。内容をまとめると以下のようになる。

1. 文法かコミュニケーションか

先生によるとこの命題は、英語教育界では約30年周期で振り子のように揺れているということであった。現在はコミュニケーションの側に大きく振れているが、2030年頃は文法が重視されるようになるであろうと予言された。

2. バランス感覚の重要性

歴史研究者は、世間がコミュニケーションが重要

だと叫んでいる時にこそ、文法が重要であるという視点を持つべきである。

3. 教授法の新時代

従来の欧米の理論のトップダウン方式から、教師中心の教授法を確立すべきである。現場の教師は実践者であるとともに研究者であるべきで、教師一人一人が教授技術を設計する時代になるであろう。

4. 教科書の文体は authentic ではない

この事実を意外にも英語教師は知らないのではないか。もともとはパーマー博士が、日本の教科書を作るときにあらゆる文体に共通である文体として平明体を作った。それが今日の教科書英語であり、そろそろ authentic な英語に変えるべきなのではないか。

他に文法の積み上げ式の問題、語彙の問題(新語の密度等)、IPA 発音記号の問題まで内容豊かであったが、どれも現場の教員としては腑に落ちる話題であった。

実は私がこの講演を聞くのは3回目である。不思議に飽きがこない。論文の添削も入れれば4回接したことになるが、それぞれに考えさせられる問題があった。緻密で実証的な研究に基づいたこの講演は、それほど含蓄深いものであるという証明に他ならない。ということで先生のご講演の真髄を理解するには後2、3回は聞いたほうが良いのかもしれない。

内容が充実し含蓄が深いため、適切な纏めになっているか不安ではあるが、報告者の不徳のせいにして頂ければ幸いです。

(保坂芳男・山口県立柳井商業高等学校)

中国・四国支部ニュース

平成 17 年度第 1 回役員会報告

5月28日(土)午前10時より12時まで、支部役員会が開催されました。出席者は10名。議題および協議内容は以下の通りです。

(1) 平成 17・18 年度役員の出選について

昨年度第3回役員会(3月26日)の決定をもとに役員の出選を行いました。新支部長に竹中龍範氏、新副支部長に田村一郎氏、田村道美氏。小篠前支部長は理事。また、理事の多田保行氏と野村勝美

氏の退任が了承されました。そのほかの役員は、副支部長の田中正道氏をはじめ、顧問、理事、会計監査とも留任となりました。

なお、事務局と紀要担当を兼務する馬本氏の負担を軽減するため、事務局体制を強化する組織編制について検討することとなりました。また、今後の役員会は基本的に「理事会」とすることとし、必要に応じて顧問の先生方を交えた「拡大役員会」の開催を検討することとなりました。

新役員の一覧を以下に掲載します。

平成 17・18 年度役員

支部長：竹中龍範

副支部長：田中正道・田村一郎・田村道美

顧問(相談役)：定宗一宏・妹尾啓司・寺田芳徳・
松村幹男

顧問：五十嵐二郎・江川義雄・小泉 凡

理事：上杉 進・小篠敏明・河口 昭・築道和明・
那須恒夫・能登原昭夫・深澤清治・

風呂 鞏・松岡博信(会計担当)・村端五郎

事務局長：馬本 勉(紀要担当兼務)

会計監査：鉄森令子・山本勇三

(2) 平成 16 年度活動報告について

事務局より昨年度の活動について報告が行なわれました。内容は、(1)支部総会、(2)第 1 回研究例会(広島)、(3)第 2 回研究例会(高知)、(4)『英學史論叢』第 7 号の発行、(5)『ニューズレター』No.38~No.41 の発行、(6)役員会の開催(第 1 回~第 3 回)、以上の 6 項目です。詳細は『英學史論叢』第 8 号をご覧ください。

(3) 平成 16 年度会計報告・会計監査報告について

会計担当より会計報告、続いて会計監査による監査報告が行なわれ、いずれも了承されました。詳細は次の通りです。

平成 16 年度 会計報告

[収入]	
繰越金	- 21,234
預金利子	1
年会費(47 口 学生 2 口)	139,000
収入合計	117,767
[支出]	
通信費	32,910
印刷費	68,460
会議費	3,200
講師謝礼	20,000
雑費	8,378
支出合計	132,948

次年度繰越金 - 15,181

以上、ご報告申し上げます。

平成 17 年 4 月 30 日 会計 松岡博信[㊞]

平成 16 年度会計監査報告

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類、及び領収書等により監査いたしました。その結果、全て適正、正確に会計処理ができていたことを確認いたしました。

以上報告いたします。

平成 17 年 5 月 26 日 会計監査 山本勇三[㊞]

鉄森令子[㊞]

(4) 平成 17 年度活動計画について

今年度の活動計画が以下の通り提案され、了承されました。前号ニューズレターですでお知らせした予定とほぼ同じです。

(平成 17 年)

- 4 月 ・ニューズレターNo.42 発行
- 5 月 28 日 ・第 1 回役員会および支部総会
・第 1 回(通算 52 回)研究例会
・『英學史論叢』第 8 号発行
- 7 月 ・ニューズレターNo.43 発行
- 10 月 ・全国大会(22 日~24 日 福岡大学)
・ニューズレターNo.44 発行
- 12 月 3 日 ・第 2 回役員会
・第 2 回(通算 53 回)研究例会

(平成 18 年)

- 1 月 ・ニューズレターNo.45 発行

・役員会は 5 月と 12 月の例会時にのみ開催することとし、年 2 回となりました。

・紀要担当より、投稿論文が少なかつたため『英學史論叢』第 8 号の発行が遅れるとの報告がありました。また、支部総会時の発行を厳守するために、投稿締切を早めることが提案され、了承されました。

・今年度第 2 回の研究例会を、12 月 3 日(土)、岡山市内で開催することが提案され、了承されました。担当は能登原理事をお願いすることとなりました。岡山例会の詳細は、次号のニューズレターでお知らせいたします。

(5) その他

継続審議となっている支部の活性化について意見交換が行なわれました。

馬本事務局長より、若手を中心とした事務局体制を組織する中で、学会との関わりを深めてもらう機会を増やす方向で検討したいとの意見が出されました。

中国・四国支部事務局より

『英學史論叢』第8号の発行について

『英學史論叢』第8号(通巻28号)を発行いたしました。遅れましたことをお詫び申し上げます。

研究発表者を募集します

今年度第2回研究例会は、12月3日(土)、岡山市内で開催の予定です。その例会での発表者を募集します。研究発表(口頭発表30分・質疑応答20分・計50分)をご希望の方は、9月末日までに事務局へご連絡ください。特に若い会員の皆様の積極的な発表をお願いいたします。

ニューズレター原稿募集!

英学史にまつわる「エッセイ」「研究メモ」「読書ノート」などの原稿をお寄せください。いずれも400~800字程度。電子メールまたはワープロ印字原稿を事務局までお送りください。次号以降のニューズレターに掲載させていただきます。

英学史研究の「裾野」を広げるため、多数の皆様のご協力をお願いいたします。

新入会員のご紹介

平成17年度の新入会員をご紹介します(敬称略)
瀬戸麻由佳(広島)

日本英学史学会(本部)の動き

日本英学史学会第42回全国大会

今年度の全国大会は10月22日(土)~10月24日(月)福岡大学文系センター(福岡市城南区七隅19-1)を会場として行われます。

第1日(10月22日・土)13:30開会

- ・特別講演「九州の英学」(田中啓介氏)
- ・シンポジウム「漱石と九州」(原武哲氏ほか)
- ・懇親会(福岡大学文系センター16Fスカイラウンジを予定)

第2日(10月23日・日)

- ・研究発表(午前・午後)

第3日(10月24日・月)

- ・英学資料展 九州大学図書館「筑紫文庫」閲覧

全国大会へのご参加、および日本英学史学会(本部)への入会に関するお問い合わせは支部事務局まで、ご遠慮なくどうぞ。

日本英学史学会(本部)の会員登録は、中国・四国支部への入会とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費5,000円)。

会費納入のお礼とお願い

すでに多くの皆様より今年度の会費をご納入いただきました。ご協力に厚くお礼申し上げます。なお、これからお振込みの方は、前号に同封の振込み用紙(郵便振替)により、一般3,000円、学生(院生を含む)2,000円をご納入くださいますようお願い申し上げます。

(口座番号) 01360-9-43877

(加入者名称) 日本英学史学会広島支部

<<広島英学史の周辺(10)>>

会員の皆様から、ご自身のご研究、あるいは地元の英学史関連の研究物を頂戴し、拝読するときの喜びは何物にも代え難いものです。昨年度末以降頂戴したご研究の一部をご紹介します。松村幹男先生より、ご著書『明治期・英語教授学習編年史(私家版)』(西日本文化出版、2005)ならびに『随想 英学史の旅(私家版)』(西日本文化出版、2005)。前者は『広島大学教育学部紀要』第2部に1980年から1994年にかけて先生がご発表になった9論文を所収。後者は昭和52年度のNHKテレビ「英語会話」の月刊テキストに12回にわたって連載された、先生の英米でのご体験と各地での英学史研究をまとめられた随想集です。風呂鞆先生より、『へるん』特別号(八雲会・松江国際シンポジウム実行委員会、2005年3月)、『へるん』第42号(八雲会、2005年6月)。前者はハーン没後100年を記念して昨年10月に松江で開催されたシンポジウム報告書。後者には風呂先生による北海道での講演記録「記念講演・銭本健二とハーンの旅」および書評「高木大幹『ハーンの面影』」が所収されています。両先生のご研究に深く感銘を覚え、英学史の道を歩み続ける喜びを感じています。能登原昭夫先生より、山陽学園大学・山陽学園短期大学社会サービスセンター(編)『日本の文化・岡山の文化』(吉備人出版、2005)。先生が長年ご勤務なさった山陽学園大学で行なわれた昨年度の公開講座の記録・講演集です。同大学・濱田栄夫教授の「岡山とエスペラント運動 ガントレットとエロシエンコを中心に」では、明治33年から岡山の第六高等学校で英語を教えたガントレットがエスペラントに出会い、それを広めていく様子が描かれています。彼の義弟・山田耕筈(作曲家)がエスペラントを熱心に学んだエピソードも、岡山の英学がぐっと身近に感じられ、12月の例会が待ち遠しくなりました。猛暑が続きます。ご自愛のほど。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.43

2005年8月5日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学
馬本研究室内 電話&FAX:(0824)74-1725(直通)
e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp
ホームページ: http://tom.edisc.jp/eigaku/